

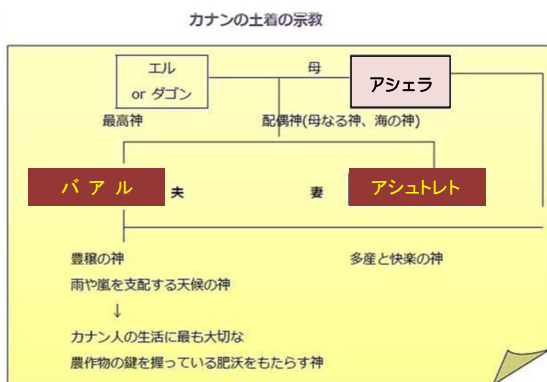
006 士 師

イスラエル人はヨシュアに導かれて、約束の地の多くを征服した。しかし、ヨシュアの死後、イスラエルは衰退への道を歩み、カナンの宗教がもたらす性的誘惑に負け、神と神の恵みを忘れてしまう。そして、預言者サムエルとサウル王の時代になるまで一人の指導者の下に統一されることはなかった。

「そのころイスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に正しいとすることを行っていた。」

(士師記 17 : 6、21 : 25)

この時代、イスラエルにとって大敵となったのは、カナン人（「商人」の意）だった。もともと海岸沿いに住む人々をカナン人と呼んでいたが、後に、地中海とヨルダン川の間に住む人々の総称になった。カナン人は、高度な文明を持っており、「アルファベット」を発明した人々である。イスラエルの人々にとって、脅威となったのは、カナン人の文化ではなく、宗教であった。カナン人は、



自然の力を擬人化して礼拝する「豊穡宗教」を信仰していた。エル（最高神）の息子「バアル」は、豊穡と天候の神であり、力の象徴である雄牛の上に立ち、手には天候を司ることを象徴する稲妻の槍を持った姿で描かれる。エルの妻アシェラ（豊穡の女神）とバアルの妻アシュトレト（アシュタロテ）も信仰の対象だった（→バアルの神殿とアシュトレトの神殿は、通常一緒にあり、女祭司は神殿付きの売春婦であった。バアルとアシュトレトは男神と女神であり、双方が交わる

ことによって、子どもや家畜、作物の高収穫がもたらされると信じられていた。カナンの神々は異教の神々の原型であり、やがてギリシアやローマの神々にも、大きな影響を与えることとなる。）。これらの神々を儀式的な売春を通して礼拝すると、土地が豊作になると信じられていた。このように、宗教を口実にして、奔放な性行為ができたので、何世紀にもわたってイスラエルが豊穡宗教に引き付けられた。また、子供を生贄として奉げるイスラエル人もいた。だからこそ、神はイスラエルに、この土地からカナン人を完全に排除するように命じたのである。ところが、イスラエル人がそのようにできなかったので、士師の時代を通して、イスラエルの中にはカナン人が未だに残っていた。

しかし、神は、そんな彼らを見捨てることはなかった。愛のこもった懲らしめとして、神は近隣の国々がイスラエルを攻撃することを許された。それによって、イスラエルが神を叫び求めるようにする為である。イスラエルの歴史の中でも陰惨な時期に、統治者、軍事指導者として仕えたのが12人の士師である（士師の中には色々欠点や問題のある人物もいたが、暗黒の当時としては、神が用いることのできる最善の人物であった）。

「士師」とは、「さばきつかさ」とも訳されるイスラエルの政治的指導者で、カナン征服から王国成立までの期間に活躍した12人である。

イスラエルが、自由→背教（背信）→束縛された状態（裁き）→悔い改め→解放（救い）というサイクルを何度も繰り返す中で、士師の統治の多くは悲劇的な結果に終わった。

しかしそのような悲劇の歴史の中にあっても、対極には忠実さを貫き、背教の世にあって信仰と勇気をもって行動する力強い模範を示した人々の物語が士師記である。

士師の支配地域は一部の部族とその周辺に限定されている地方分権で、王政とは違い世襲制ではなかった。大士師と小士師に分けられ、前者は他民族からの圧迫から民を救う英雄であり、後者は外敵の攻撃とは直接関係しない裁判人や仲裁者を指す。

●大士師：オトニエル、エフド、デボラ、ギデオン、エフタ、サムソン

●小士師：シャムガル、トラ、ヤイル、イブツァン、エロン、アブドン

1. **オトニエル**（ユダ族、カレブの弟ケナズの子）

主の霊（神の力）により、イスラエルをアラム人（クシャン・リシュアタイム王）の手から救った。圧迫されていた期間（以下、圧迫期間）8年間（士師記3：8）。国は40年間、平穏であった。

→士師記3：7～11

2. **エフド**（ベニヤミン族、ゲラの子、左利き）

モアブ王エグロンが率いる約一万のモアブ人を打ち殺し、イスラエルを救った。圧迫期間18年（士師記3：14）。国は80年間、平穏であった。

→士師記3：12～30

3. **シャムガル**（イスラエル人ではない？、アナトの子）

牛追いの棒でペリシテ人600人を打ち、イスラエルを救った。圧迫期間等は不明。

→士師記3：31

4. **デボラ**（女預言者、エフライム族、ラピドトの妻）★

唯一の女性。バラク（ナフタリ属）を励まして、カナン人の王ヤビンの將軍シセラを打倒した。圧迫期間20年（士師記4：3）。国は40年間、平穏であった。

→士師記4：1～23

デボラの物語は士師記4章と5章に出てきます。イスラエルの民は神様の教えに従わなくなったため、カナンの王ヤビンに支配されてしまいます。ヤビンは鉄の戦車を900両持っていました。それで20年間もイスラエルを力で押さえつけていました。そのときイスラエルをカナンの王ヤビンから助けるために用いられた人物がデボラでした。デボラは女性でした。ラピドトの妻で、女預言者で士師でした。デボラはバラクを呼び寄せて、人々を集めてヤビンの軍隊と戦うようにと指示します。バラクはデボラと一緒に、ヤビンの軍隊と戦うためにタボル山に民を集めました。デボラはバラクに、この戦いが神の戦いになることを説明するために、2つの言葉を使いました。一つは、神様がヤビンの將軍シセラをキシヨン川に「集結させる」という言葉です。これは、魚が網にひっかかることを意味する言葉です。そして、もう一つの言葉は、そこで神様がシセラとその戦車や軍隊を、バラクの手で「渡す」という言葉です。実際、タボル山にバラクとデボラとイスラエルの民1万人が集まると、シセラの900両の鉄の戦車と軍隊は戦うために出てきます。そして、キシヨン川の近くの狭い道で、大雨のため泥にはま

って鉄の戦車が動かなくなります。また兵隊は水が増した川の流れて押し流されてしまいました。命からがら逃げたシセラも、ヘベルの妻ヤエルによって殺されます。こうして、戦いには不似合いな2人の女性の活躍で、イスラエルの民はカナン王ヤビンの支配から助けられます。

5. **ギデオン** (マナセ族、アビエゼルの人ヨアシユの子) ★

臆病、消極的な性格で、神と論じ、神のしるしを見せてほしいと願ったが、ミディアン人を打ち負かした。イスラエル人はギデオンに王になってほしいと頼んだが、ギデオンは拒んだ。圧迫期間7年(士師記6:1)。国は40年間、平穏であった。バアルの祭壇を破壊した士師ギデオンはエルバアル(バアルは自ら争う)と呼ばれた(士師記6:32)。

→士師記6:1~8:35

士師記6章と7章には、ギデオンを用いて、神様がイスラエルの民をミディアン人から救われた物語が書かれています。デボラによってヤビンの手から助けられたあと、40年間イスラエルは平和でしたが、また民が「主の目に悪とされることを行った」ので、イスラエルの民は7年間ミディアン人から苦しめられます。カナン王の力は鉄の戦車でしたが、ミディアンの力はその数の多さでした。「いなごの大軍」のように人もらくだも多いミディアン人は、イスラエルにやってきて作物を荒らし、家畜を盗んでいきました。この苦しみから民を救うために選ばれたのがギデオンです。主の御使いがギデオンの前に現れて「勇者よ、イスラエルを救い出せ」と語りかけます。ところがギデオンはその御使いに「私は弱いからムリです」と尻込みします。神様はいくつものしるしをギデオンに見せて、一緒にいるから大丈夫だといいます。そして神様から勇気を与えられたギデオンは、たった300人の兵隊と一緒にミディアンの大軍を滅ぼします。自分の弱さを知っていたギデオンは、神様に信頼することだけが、戦いに勝つ力だと信じました。このようにして、また、イスラエルは助けられました。

6. **トラ** (イサカル族、ドドの孫でプアの子)

23年間、士師として、イスラエルを裁いた。トラがどのようにイスラエルを救ったのか、また、どの民族がこの時にイスラエルを何年苦しめていたかは不明である。

→士師記10:1~2

7. **ヤイル** (マナセ族ギレアド人)

ヨルダン川の東側でヤボク川の南北に広がる高地、ギレアドの富裕な人物で、22年間、士師として、イスラエルを裁いた。圧迫期間は不明。

→士師記10:3~5

8. **エフタ** (マナセ族ギレアド人、父ギレアド、母は遊女)

アンモン人を打ち、6年間、士師としてイスラエルを裁いた。圧迫期間18年間(士師記10:8)。

→士師記10:8、11:1~12:7

9. **イブツァン** (ユダ領の有名なベツレヘムではなく、ゼブルン領のベツレヘム出身)

子沢山(豊かで力を持つことを意味)で、7年間、士師としてイスラエルを裁いた。圧迫期間は不明。

→士師記12:8~10

10. **エロン** (ゼブルン族): 10年間、イスラエルを裁いた。圧迫期間は不明。

→士師記 12 : 11~12

11. **アブドン** (エフライム族、ピルアトンの人ヒレルの子で裕福)

8年間、士師としてイスラエルを裁いた。圧迫期間は不明。

→士師記 12 : 13~15

12. **サムソン** (ダン族) ★

イスラエルの民がペリシテ人に支配され、40年間(士師記 13 : 1)、苦しめられていた頃、ダン族の男マノアの妻に主の使いがあらわれる。彼女は不妊であったが、子供が生まれることが告げられ、その子が誕生する以前から既に神に献げられたもの(ナジル人:自らを神にささげ、献身を表すために特別な規則を守らなければならなかった)であるため、次のことを守るよう告げられた。それは、ぶどう酒や強い飲み物(ビールという説もある)を飲まないこと、汚れたものを一切食べないこと、そして生まれる子の頭に剃刀をあてないことの三つであった。神の使いはマノアと妻の前に再び姿をあらわし、同じ内容を繰り返した。こうして生まれた男の子がサムソンであった。

サムソンは長じた後、あるペリシテ人(ペリシテ人は地中海沿岸の平野に住み、イスラエルの民には絶えず問題の種となっていた)の女性を妻(当時、結婚相手は当人が選ぶのではなく、両親もしくは父親が決め、また、外国人との結婚は外国の神々を礼拝することになるので禁じられていた)に望み(サムソンは肉体的には強かったが他の面で弱さ一かたくなで、我を通し、イスラエル人でない女性に魅かれた一があった)、彼女の住むティムナ(マハネ・ダン-ダンの宿営一から約6km南西にある町)に向かった。その途上、主の霊がサムソンに降り、目の前に現れた獅子(ライオンは、この時代のパレスチナには珍しくなかった)を、子山羊を裂くように裂いた。ティムナの女との宴席で、サムソンはペリシテ人たちに謎かけ(古代では、知識や知恵を試すために用いられ、難しい謎が解ければ、高い報酬や地位にふさわしい人物と考えられた)をし、衣を賭けた。ペリシテ人は女から答えを聞きだし、サムソンに答えた。サムソンは主の霊が下ってアシュケロン(地中海沿岸の平野南部にあるペリシテ人の町で、ティムナの南西約35kmにある)で30人のペリシテ人を殺害してその衣を奪い、謎を解いたペリシテ人たちに渡した。〈サムソンはティムナでの個人的な借りを返すためにアシュケロンを襲った〉ティムナの女の父はこの一件の後、娘をほかの男性に与えた。サムソンはこれを聞いて、300匹のジャッカル(狼)の尾を結んで、それぞれに一つずつ松明をむすびつけ、ペリシテ人の畑などを焼き払った。ペリシテ人はその原因がティムナの父娘にあると考えて二人を殺したが、サムソンはこれにも報復してペリシテ人を打ちのめした。ペリシテ人は陣をしいてサムソンの引渡しを求めた。ユダの人々は、ダン族の荒くれ男サムソンを助ける理由はなく、ペリシテ人との戦いを避けるため、これに応じた。ペリシテ人はサムソンを縛り上げて連行したが、途中で主の霊が降ると縄が切れて縄目が落ち、サムソンは、(鎌のような武器として)「ろばのあご骨」で、ペリシテ人1000人を打ち殺した。〈サムソンの戦いはイスラエル部族を敵から救おうという思いではなく、個人的な復讐心が動機であった。主の霊が降ると、サムソンは超自然的な力を受けた。〉

サムソンは20年間、士師としてイスラエルを裁いた(詳細は不明)。その後、サムソンはソレクの谷(エルサレムの南西約20kmに源を持つソレク川の流域)に住む**デリラ**(サムソンの物語で名が挙げられている唯一の女性)という女性を愛するようになったため、ペリシテ人はデリラを利用してサムソンの怪力の秘密を探ろうとした。サムソンはなかなか秘密を教えなかったが、とうとう頭

にかみそりをあててはいけないという秘密を話してしまう。デリラの密告によってサムソンは眠っている間に頭をそられて力を失い、ペリシテ人の手に落ちた。彼は目をえぐり出されてガザの牢で粉をひかされるようになった。ペリシテ人は神ダゴンに感謝し、サムソンを引き出して見世物にしていた。しかしサムソンは神に祈って力を取り戻し、つながれていた二本の柱を倒して建物を倒壊させ、多くのペリシテ人を道連れにして死んだ。このとき道連れにしたペリシテ人はそれまでサムソンが殺した人数よりも多かった。自分の人生に対する神の召しをあまりにも軽く見た男、サムソンの悲惨な最期であった。

→士師記 13：1～16：31

※サムエル

サタンは、神の民イスラエルに対してさまざまな攻撃を仕掛けてきました。サムエルの時代にサタンが仕掛けてきた攻撃は、体制への攻撃と言ってもいいかもしれません。モーセの時代から士師の時代まで、イスラエルには王がいませんでした。神様が直接、祭司や預言者などを通して民を治めていました。祭司は世襲制で、祭司の息子が祭司になり、その息子がまた祭司になるという形で子孫に祭司職が引き継がれていました。祭司エリの息子たちは悪く、エリもそんな息子たちを、きびしく罰しませんでした。そんな祭司エリのもとに、幼いサムエルがあずけられます。サムエルはエリの息子たちとは正反対で、神様に忠実に仕えました。エリの息子たちはペリシテ人との戦争で死に、その知らせを聞いたエリも死にますが、サムエルはイスラエルの指導者になります。しかし、サムエルの息子たちは、サムエルの忠実さを見習わず、お金をもらって裁きを曲げました。そのため民は彼らの言うことに従うことを喜ばず、周りの国と同じようにイスラエルにも王を立ててほしいと求めました。サムエルは神の預言者で、イスラエルの最後の士師です。また、サウルに油を注いでイスラエルの王に任命しました。サウル以降は王がイスラエルを治めるようになりましたが、それからの時代は、王という1人の人間の弱さをサタンは攻撃するようになりました。王を悪くすることができれば、イスラエルの民全体を簡単に悪くできることを、サタンは知っていたのでしょう。イスラエルのその後の歴史を見れば、このサタンの計画は見事に成功したといえるでしょう。